

「打たれたので」金「フム鐵扇で打たれたとな、何故又君は左様な亂暴をなさるので」○「將棋を差して敗けると打たれるのです」金「そりや仕方が御座らん……流石は菅沼氏は紀州家に於て一と呼ばれて二と下らん將棋の名人と聞きしだけに、お敗けなさらんと見えて頭が腫れてござらんな」菅「イーエ何うして拙者は最初からやられて居りますので」金「夫れでも腫れて御座らんぢやないか」金「モウベツタリと腫れて目立たぬやうになつて居るので」金「コリヤ怪しからん菅沼氏がお敗けになると云ふからは若君は餘程差しますのぢやな」菅「イヤ、弱い」金「弱いの強い者が敗ける法がないではないか、如何に勝負は時の運とは云ひながら……ハ、ーンさては若君と云ふ所で勝を譲り追從輕薄いたして御加増にでもならうと云ふ御心中でござるな、何故武士たる者が槍先で知行をお取りなさらん左様な追從輕薄などする武士は犬侍盜人侍と申す、馬鹿者奴がッ」と怒鳴り附けられ○「拙者も是れで得心ぢや、殿様には毎日頭を打たれ、石部氏には馬鹿侍、犬侍、盜人侍と云はれて愈よ芋屋でもするか紙屑買でもする方が樂で御座居ます」△「如何にも左様で御座る」金「強い者が敗ける法はないではないか」菅「それが何うしても勝てんので」金「何故勝てぬのか」菅「殿様が銀を横にお寄せなさるので」金「何銀を横に寄せる」菅「金を斜に下つて入合せをすると仰しやつて……」金「そんな亂暴な將棋はない、左様なことをなされば金銀の働きが狂ふぢや御座りませんかと何故申さん」菅「可ません、予の王は先程から逃げ廻つて居る王が逃げれば亂世である、亂世に金銀の狂ひは當然の事ぢやと仰します」金「夫れは丸で仁輪加ぢやがな」菅「夫れから飛車が成らん先に横斜に行つて角を眞直に行て入合をするとか、桂馬が五つも六つも向方へ飛んで、此の位飛ぶ名馬でないと戰場で間に合ふかと此んな事を仰しやります、又香車を縦横十文字に行て予の香車は寶藏院流の遣人だ、此の槍先が受けられるなら受けて見よなど、云はれる、夫れでも好い加減に扱つてやつて居りますと王様が詰掛けますと、予の王は源義經だ、八艘飛を以て逃れると云つて王様を將棋盤の下え放り込んでしまふてです、敵の王無しに將棋が差せますか差せませんか考へて貰ひたう御座ります」金「フム、そんな亂暴な將棋は御座らん」菅「夫れでは皆が負けしますので、負けるとやられます」金「そんな亂暴な事をなされば何故諫言なさらんのぢや」菅「諫言しても聞いて下さないので」金「一度二度諫言をしてお聞入なき時はなぜ切腹をして御意見なさらんのぢや、斯様な事が他國へ聞へては我國の恥辱になる事で御座るぞ、此の國で祿を食みながら、國の恥辱になることを捨置くとは何事ぢや、斯様な武士を犬侍、馬鹿侍、盜人侍と申したのが石部の誤りで御座るか、馬鹿侍奴がッ」菅「ホイ、叱られ直しやぜ……」此の聲が若君のお耳へ入りましたと見え。若「コリヤ、詰所にて高聲に罵り居る者は何者ぢや」○「ハイ、石部金吉郎にござります」若「オ、石部か呼べ」○「ハッ……アイヤ石部氏、上のお召で御座る」菅「石部氏、お氣をお付け召されよ、貴殿も頭を打たれますぞ」金「さう無暗に鐵扇で頭を打たれて堪るものか、借物の頭なら構はんが、皆自前の頭だ……ハ、ッ若君には麗はしき御尊顔を拜し、